

2019年1月20日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「湖畔に立つイエス」

聖書：ルカによる福音書5：1～11

「ゲネサレト湖畔」とは、ガリラヤ湖のこと。ルカ福音書ではガリラヤ湖とは呼ばない。旧約では、「キネレト湖」と呼ばれていた。キネレトはヘブライ語で「豎琴の海」の意味。琴の海と呼ばれるこの湖は、穏やかな湖で人を癒し、養うきつと豊かな湖ゆえに名づけられたのであろう。しかし、新約の時代になると、その名(豎琴の海)では呼ばれない。この時代はローマ帝国の植民地とされていた地域で、ガリラヤ湖の魚がローマ人に評判がよく、特に塩漬けにされたガリラヤ産の魚が貢ぎ物として大量に納められていた。魚が乱獲されていたということ。地元の人々が食べることも、ローマ人の口に入るために塩漬けにされ、持ち出されて行っていた時代だった。漁師たちは、そのために利用されて行く。自分たちの生活が実はむしろまされて行くとは分かりつつも、そうせざるを得ない状況に追いやられて行く。「夜通し苦勞しましたが、何も取れませんでした」とあるのは、乱獲のため魚が激減しているとも考えられる。

漁師にとって、これほど不安で失望感に陥ることはない。イエスは、その状況に黙ってはおれなかった。漁師シモンたちに声をかけて行く。“さあ、漁をしよう。さあ、網を降ろしてみよう。魚はきつという”。失望感に満ちている漁師たちに、向き合い、励ましていく。そしてイエスは、「人間をとる漁師に」というが、「人間をとる」とは、もう一つの見方として「人間を取り戻す」という意味がある。イエスによって、励まされ、勇気と希望を見出すことが出来た者たちよ、今度はあなた方が、「人間を取り戻す」働きを担ってくれ。一緒にその働きを成して行こう。

今、辺野古の海はどう呼ばれているか。終戦直後、辺野古の海は飢えをしのぐには十分すぎるほどの食の糧を得ることが出来たという。人を癒し、人を養う豊かな海として人々の記憶の中にあるのかと思うが。しかし今や、時代の変遷により、軍事基地の海に変貌しようとしている。余りにも強引に権力を振りかざして露骨に。漁に出ることも許されない、辺野古の漁師たちの思いはどれほど苦しんでおられることか。失望と落胆の思いが見えて来る。キリストは、その辺野古の海の変遷の只中に立っておられる。辺野古の漁師たちの、植民地扱いされるこの沖縄の只中にキリストは居られる。そのことに励まされ、希望をもって辺野古の海を守りたい。(神谷)